

樺太時代に生きた ポーランド人

講演会

～彼らはどこから来て、いかに生き、
そして、どこへ帰ったのか～

日時：2014年6月28日(土)
14時～16時

場所：駐日ポーランド共和国大使館
(東京都目黒区三田2-13-5)

(事前登録)

参加希望者は6月20日(金)まで
に以下へご連絡ください。

携帯:090-6447-1700(佐光);
メール:ssamitsu@hotmail.com



講師 尾形 芳秀

(北海道ポーランド文化協会会員)

入場無料



豊原高等女学校に学んだポーランド女性

日本時代の樺太にポーランド人がいたことは
ほとんど知られていない
わずかに残されている日本の公式資料を
読み解いたものはみかけられない
母国から1万キロ以上も離れた樺太に
彼らはなぜ、残留の道を選んだのか
なぜ、日本人と共生したのか…

日本とポーランドの交流史の空白を
今、明らかにしたい…



小沼のチェハンスキ家のログハウス



樺太時代のポーランド人の結婚式

後援:  ポーランド広報文化センター
INSTYTUT POLSKI TORII

戦後六十九年ぶりに未公開写真でたどる彼らの旅路

主催 北海道ポーランド文化協会・第69回特別例会

講師紹介 (おがた よしひで)

1937年、樺太・豊原市生まれ、北海道育ち、戦前から戦後まで豊原で過ごす。

豊原は、ロシア時代は「ウラジミロフカ」という小さな集落で、樺太時代には「旧市街」とも呼ばれた。そこにはロシア風の丸太小屋が点在し、ポーランド人家族も住んでいた。講師は、彼らと同じ地区に住み、遊び、同じ学校で学んだ経験をもつ。

定年後、郷土史家として樺太に関心をもち、樺太豊原会機関誌『鈴谷』(すずや)の編集に携わってきた。札幌在住。

講演要旨

ポーランドが123年間にわたって近隣帝国に分割統治された時代に、極東の流刑地サハリン島に送られてきたポーランド人がいた。多くは政治犯とされる。

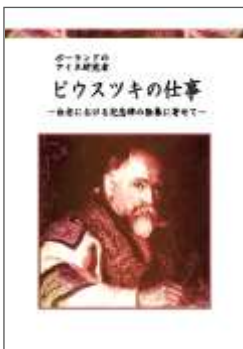
彼らは帝政ロシア時代には流刑囚、樺太時代には残留者や亡命者として生き、いつの日か母国に帰る日を待ち望んでいた。この過酷な極東の島で、彼らはいかに生きたのか？ それは想像を絶するものだった。彼らの、生きて母国に帰るといふ強い信念には、時代を越えて感動を呼ぶものがある。

これはサハリン島時代(1875-1905)から樺太時代(1905-1945)に生きたあるポーランド人一家の足跡の調査記録である。

講演会の背景

2012年3月に第59回例会として尾形氏の講演「樺太のポーランド人の軌跡」を聞いた。

昨年10月には、ポーランド政府が寄贈したブロニスワフ・ピウスツキ胸像の除幕式(白老)と記念セミナー(札幌)が行われ、記念冊子『ピウスツキの仕事』(北海道ポーランド文化協会、北海道大学スラブ研究センター、2013年10月20日)が刊行された。そのなかにはアレクサンデル・ヤンタ=ポウチ



ンスキの樺太訪問記「樺太のポーランド人」(佐光伸一訳/井上紘一・尾形芳秀注釈)が収録されている。ポウチンスキはユゼフ・ピウスツキ元帥の命により1934年に樺太を訪れ、元帥の兄ブロニスワフ(1866-1918)の遺族(妻チュフサンマ、息子木村助造、娘キヨ)や在留ポーランド人と面会している。

また本年2月にコザチエフスキ駐日ポーランド大使が札幌にみえて、尾形氏の案内で道庁赤レンガ庁舎・樺太関係資料館の樺太残留・亡命ポーランド人の記録を見学して大いに興味をもたれた。これが直接のきっかけとなって、東京での講演会が実現した。

地図 & アクセス



お問い合わせ

北海道ポーランド文化協会

・事務局 〒006-0006

札幌市手稲区西宮の沢6条

1丁目16-1-210 佐光方

TEL/FAX:011-215-6696;

Mobile:090-6447-1700 (佐光);

Email:ssamitsu@hotmail.com

・東京事務所 〒107-0052

東京都港区赤坂9-6-29-309

音響計画株式会社社付

TEL:03-6804-1058;

FAX:03-6804-6058I;

Mobile:070-5604-7059 (霜田);

Email:shimoda@acoustic-plan.com